いづれの御時に（断定「なり」用）か（係・疑）、女御・更衣（にょうご・こうい）あまた候ひ（過去「けり」体）給ひ（Ⓚ作者→帝 Ⓢ作者→女御・更衣 打消「ず」体）ける中に（格助）、いとやむごとなききはにはあらぬ（断定「なり」用）が、すぐれて時めき（形容詞・体 過去「けり」終）給ふ（Ⓢ作者→桐壺）ありけり（存続「り」体）。初めより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきもの（形容詞・体）に（格助）、おとしめ（見下す・さげずむ）、そねみ（憎む・ねたむ）給ふ（Ⓢ作者→御方々）。同じほど（身分の程度）、それより下臈（げろう）の更衣たちは、ましてやすからず（打消「ず」終）。朝夕の宮仕へに（格助）つけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにや（係・疑）ありけむ（断定「なり」用 過去原因推量「けむ」体）、いとあつしくなりゆき（形容詞・用 打消「ず」用）、もの心細げに里がちなる（形容動詞・用 形容動詞・体）を（格助）、いよいよ飽かずあはれなるものに（格助）思ほし（尊敬「す」用 打消「ず」用）て、人のそしりをもえ（副・不可能）はばから（形容動詞・体）せ給はず（Ⓢ作者→帝）、世のためしにもなりぬべき（強意「ぬ」終 推量「べし」体）御もてなしなり（断定「なり」終）。

上達部・上人なども、あいなく目をそばめつつ、いと（形容詞・用）まばゆき人（かんだちめ・うえびと）の御おぼえなり（断定「なり」終）。唐土（もろこし）にも（格助）、かかることの（形容詞・体）起こりにこそ（格助 係・強意）、世も乱れ、あしかりけれ（形容詞・用 過去「けり」已）と、やうやう天の下にもあぢきなう（形容詞・用）、人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃（ようきひ）のためしも引き出でつべくなりゆくに（強意「つ」終 当然「べし」用 格助）、いとはしたなきこと（形容詞・体）多かれど、かたじけなき（形容詞・体）御心ばへのたぐひなき（形容詞・体）を頼みにて（格助）、まじらひ給ふ（Ⓢ作者→桐壺）。

※帝のことではない。「桐壺」のこと。「帝」なら「人」とは言わない。「の」は「対する」という意味でとる。

どの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんお仕えしていなさった中に
きわめて高い身分ではないが、ひときわ寵愛を受けなさっている方がおられた。
初めから自分こそは（帝の寵愛を受けよう）と思い上がっていなさる
御方々は、（この更衣のことを）気に食わないものとして軽蔑し、憎みなさる。
同じくらいの身分の人や、それより低い更衣達はましてや気が気でない。
朝夕の宮仕えにつけても、多くの女御や更衣の心をのみ動揺させて、
恨みを受けることが重なったためであろうか、ひどく病弱になっていき、
心細そうに実家に帰りがちになったのを、（帝は）ますます不満で、
不憫にお思いになって、人の非難をもご遠慮なさらず、世間の語り草にもきっとなるに違いないほどのご待遇である。
上達部役上人なども困ったことだと目をそらしつつ、見ていられないほどのご寵愛である。唐の国でもこのようなことが
原因で、世の中が乱れ、悪かったのだと、だんだん世間でもにがにがしく、人々の悩みの種となって、
楊貴妃の例もきっと引き出すに違いなくなっていくので、
（更衣にとっては）たいへん不都合なことが多くあったが、（帝の）もったいない御愛情
が比べ物にならないほど強いことを頼りにして
（更衣は）宮仕えをしなさる。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/